



懸命に研修を受ける実習生にとって、親身になってくれる加山は強い味方なのだ。

コミュニケーションの難しさ

わずかではあるが、途中で仕事を辞めてしまう実習生もいる。困ったことや辛いことがあっても、最近の

若者は携帯電話で友人に相談するのことに慣れていて、加山に直接話をしにくいケースもあるという。

「この仕事で一番大事なのは、企業と実習生の間に入って、どうコミュニケーションをとるかです」。

実習生の思いをくみ取り、お客様からの信頼を保つことは容易ではないが、相談さえしてくれば、何か打開策があるかもしれない。普段から何でも話しやすい環境づくりに努め、コミュニケーションを大事にする理由はそこにある。

日本で働き貢献したい

日本で海外との懸け橋として働く背景には、家族のルーツがある。父はベトナム戦争後に難民として来日した。叔父の手製の小舟に20人乗り込み、命がけて出国。大海へ漕ぎだし、運よく日本の船に救助されたのだ。日本に命を助けられたという恩義を、加山は父と同様に感じている。

「父は、いまだにこの話になると涙ぐんでしまいます。私自身も助けられたと思っているので、日本に貢献したい気持ちが強いです」。

若者たちの将来と、彼らの故郷の未来のために

実習生として来日する若者たちは、帰国後には自国の発展を支える大事な人材となる。だが、残念ながら得た収入をすべて遊びに使ってしまう人もいる。そこで、今後力を入れていきたいと考えているのは、実



習生の教育だ。実習生たちの将来にも、それぞれの国の未来にも明るい道が開けるように、3年かけて優秀な人材を育てるのが目標だと話す。

そんな加山の趣味は、国際交流やごみ拾いのボランティア活動への参加だ。人のために奉仕するのは大変なことも多いが、社会に貢献できているという事実が自身の心を豊かにしてくれるという。

加山が情報ベンチャー協同組合で行っている地道な活動は、やがて実習生を通じて大きな輪となり、世界中に広がっていくことだろう。その確かな一歩を踏み出すために、加山は今日も、ここ日本で仕事に取り組み

企業情報

- ◆ 設立年：1990年6月
- ◆ 年商：53億円

※ 2019年9月時点